〈資料紹介〉

# 大学史資料の紹介

## ―実業家の側面を持った本間喜一先生―

豊橋研究支援課　小林倫幸

### はじめに

本間喜一は、大正４年、東京帝国大学卒業後、検事、判事、弁護士そして初代最高裁判所事務総長として司法界で大いに活躍された。また、一方、判事を辞めたあと東京商科大学教授（現一橋大学）、中国・上海にあった東亜同文書院大学最後の学長を務め、日本の敗戦とともに帰国、そして愛知大学の設立に中心的役割を果たしたことは既に御存知であろう。そしてその後の大学運営にあたって、資金不足に悩まされてきたが、本間が、外部から資金を調達してきたことは殿岡晟子氏（本間先生御令嬢）からお話しを伺っている。その一例として、第２代学長から離れると、本学の財政を助けるために東京商科大学の教え子である桑原用二郎から建財株式会社社長を要請され、就任した。学長を離れたあとは外で給料を稼ぎ、大学の財政を救ってきた。こうしたことは、あまり紹介されてこなかったことである。オープン・リサーチ・センター事業も５年目の最終年度となり、是非この機会に実業家としての側面を持った本間について、皆様に少しでも知っていただきたく、御紹介する次第である。

### １．建財株式会社について

建財株式会社については、殿岡氏からお話しを伺うことはできたが、大学史事務室の資料室には社長の名刺、社名入り封筒などしか資料がなく、どういう内容の会社か分からなかったので、東京の法務局で登記簿謄本を取り寄せたり、他大学・他機関で資料のコピーを取り寄せたりして調査を行なった。残念ながら平成11年３月25日付で破産宣告していた。概要は次のとおりである。

○会社設立：昭和27年４月３日

○本店：東京都千代田区丸の内二丁目２番１号（その後、本店は何度か移転登記されている。）
ちなみに本間喜一社長の名刺（写真１）には、東京都千代田区丸ノ内二―一八（岸本ビル）と記載されている。

○目的：１．不動産の売買管理、賃貸借、及びその代理、仲介、鑑定
２．土地の造成、建物並びに構築物の設計、監理施工、解体及び発生材料の販売
３．サーキット場、ゴルフ場の開発、建設、経営及び管理
４．林業、鉱業、果樹園芸業、牧畜業の経営
５．砕石砂利の採取並びに輸送販売
６．スポーツ施設、遊園地、遊技場等の施設、劇場、催事会場等の施設を有する開発及び経営
７．ホテル、旅館、別荘、喫茶店、飲食店、レストラン等の建設及び経営並びに管理

8．スーパーマーケット、駐車場の建設、経営及び管理
9．建物の保守保全管理及び附属設備の清掃保守請負
10．経営コンサルタント業務
11．有価証券の売買、保有及び運用
12．損害保険及び自動車損害賠償保障法に基づく損害保険代理業並びに生命保険の募集に関する業務
13．融資及び融資の斡旋、保証並びに代行業務
14．スポーツ用品、日用品雑貨、食料品、衣料品、煙草、印紙、切手、テレホンカード等の販売
15．自動車の車体、エンジン並びにその部品の開発、製造及び販売
16．前各号に附帯する一切の業務
平成5年6月29日変更

○資本金：3億2千万円（平成2年9月20日変更）設立当初は1千万円

○会社名の変遷：建財株式会社（昭和27年4月3日～平成2年10月1日）
株式会社レイトン（平成2年10月1日～平成10年8月7日）
泰建産業株式会社（平成10年8月7日～平成11年3月25日破産宣告）

| 年 | 帝国銀行会社要録 | 建財株式会社社長名 |
|---|---|---|
| 1952（昭和27）年 | 33版 | 記載なし |
| 1953（昭和28）年 | 34版 | 奥村眞次 |
| 1954（昭和29）年 | 35版 | 奥村眞次 |
| 1955（昭和30）年 | 36版 | 佐藤哲雄 |
| 1956（昭和31）年 | 37版 | 原玉重 |
| 1957（昭和32）年 | 38版 | **本間喜一** |
| 1958（昭和33）年 | 39版 | **本間喜一** |
| 1959（昭和34）年 | 40版 | 富永能雄 |
| 1960（昭和35）年 | 41版 | 高橋政知 |
| 1961（昭和36）年 | 42版 | 高橋政知 |
| 1962（昭和37）年 | 43版 | 赤城康平 |

帝国銀行会社要録よりまとめた

殿岡氏によると、建財は日本全土の進駐軍のタイプライターの払い下げを全部引き受けて販売した。それは飛ぶように売れたそうである。大学も安く購入し、学生の授業や事務室などで利用した。またこの儲けは、大学の運転資金にもなったとのことである。

## 2．本間喜一と高橋政知の関係について

歴代の建財社長の名前の中に高橋政知がいる。高橋は大正2年、福島市生まれ、山形高校、東京帝国大学を卒業した。「酒の強さと身長百七十八センチ、体重八十キロの大きな体も、父親譲り」[1]であった。父親政弘は山形県酒田市出身である。福島県、石川県、熊本県、新潟県、愛知県の各知事、警視総監、その後、台湾総督となった。

高橋は、昭和30年建財の常務に就任した。この会社は「義父の高橋貞三郎の知人が経営していた」[2]と書かれており、この知人とは桑原用二郎であると思われる。殿岡氏によると、桑原は高橋の書生していたようだ。その後、当時三井不動産株式会社社長の江戸英雄に請われて、昭和36年株式会社オリエンタルランド（東京ディズニーランド）へ専務として入社し、千葉県浦安の漁業組合と漁業権の交渉をまとめ、土地の埋め立て・造成を行ない、昭和53年第2代社長に就任し、昭和54年米国法人ウォルト・ディズニー・プロダクションズ（現ディズニー・エンタプライゼズ・インク）との業務提携の取りまとめ、その後、昭和58年「東京ディズニーランド」を開業した人である。設立当初のオリエンタルランドは「オリエンタルランドという名前だけは立派な会社だが、最初は部屋すらなかった。京成電鉄本社の三階に各部署が雑居している隅っこで、株式課の隣に机が三つほど置いてあるだけ。社員といっても、六十歳を超した総務部長という肩書のおじいさんと、高校を出たての事務の若い女の子、そして私の三人だけ。専用の電話もなく、いちいち隣の株式課の電話を拝借して、交換台にかけて使わねば

ならないという情けない状況だった」[3] とある。

本間の社長時代には高橋も常務として一緒に仕事をしていた間柄である。殿岡氏によると、本間は、東京ディズニーランドを創るため、千葉県浦安の漁民の立場を守りながら漁業権獲得のサポートを行ない、開業に大きく寄与したようである。また、建財社長辞任後、退職金に碁盤をいただいた。本間に現金でお渡しすると、本学の運転資金になってしまうのを心配してのことであったようだ。(写真 2)

## 3．本間喜一と桑原用二郎の関係について

桑原は明治 36 年生まれ、長崎市出身、昭和 3 年東京商科大学を卒業した。殿岡氏によると本間のゼミ生で、学生時代は貧しいので長崎の炭鉱で働いていて、試験だけ受けにきた。そして非常に本間に陶酔していて、父親のように思っていた。面白い男だからといって、本間家はフリーパス。家へ来ると、洗濯物の中から靴下を出して、自分の破れた靴下を脱いで洗いたてをはいてしまったり、食事も勝手にとらせたり、子供が病気になってもお医者さんにかかる費用がないので本間からお金を借りたりなどのエピソードがある。

本間が東京商科大学の白票事件を契機として辞職し、桑原が創った泰治洋行株式会社の顧問となっていた時期がある。白票事件とは、「1935 (昭和 10) 年 7 月 9 日の東京商科大学教授会で、杉村廣藏助教授の学位請求論文への票決の際、白票が 7 票もあったために否決となったことに端を発する学内紛争」[4] である。そして、大学史事務室の資料には、本間が泰治洋行顧問として、昭和 14 年 10 月 10 日から 1 カ月間中国に渡っていることを示すものがある。(写真 3)

泰治洋行は、「昭和 13 年 11 月、中国・北京に設立」[5]、日本製鉄株式会社（現在の新日本製鉄株式会社）の代理機関として鉄屑の買い入れを行なっていた。(写真 4) また、日本製鉄が中国・北京へ進出したのは、「日鉄が華北に直接の関係をもつにいたつたのは、昭和 11 年 (1936) 鵜瀞理事らによつて、竜烟鉄山その他を対象とする資源調査が行われたのにはじまる。その後、日華事変の勃発にともない、昭和 12 年 12 月、政府から大陸における屑鉄処理の指令をうけたのを契機として、13 年 3 月北京に北支事務所が設置され、同年 5 月正式の機構として北支出張所の発足をみるにいたつた。」とある。[6] そして泰治洋行との関係は、「昭和 12 年 12 月、上海占領を機として華中・華北戦域内における屑鉄の処理および買付けが前記のごとく商工省より指令され、ついで 13 年 5 月、海軍より日鉄に対し、青島および揚子江方面における沈没船の処理が命ぜられた。これにもとづいて、日鉄では、陸上普通屑は北支事務所において三井・三菱・三和・泰治の各社を通じて買付け、その他の鉄屑は泰治に下請のうえ処理させた。」[7] とある。

小さな名もない会社が、なぜ日本製鉄に食い込むことができたのか、これはとても不思議なことである。殿岡氏によると、本間の第一高等学校・東京帝国大学同級生に永野護おり、その弟重雄 (戦後、GHQ の指示により、日本製鉄が分割されてできた富士製鉄社長、新日本製鉄会長、そして日本商工会議所会頭などを歴任) が日本製鉄にいたことなど人脈を生かしていたようだ。また、大学史事務室の資料の中に桑原から本間に宛てた手紙（昭和 14 年 9 月 15 日付）があり、「出来得ることなら顧問としてでなくやはり泰治洋行の者として渡支されることを希望します　石炭を掘ること丈でも男としてやり甲斐のある仕事です　泰治洋行か、石炭の會社か、それとも製鉄所の代表者としてお出でになりませんか　三つとも泰治洋行と同一のものです　生活費は此方で持って月千円位いなら出せます　それ以上利益の配当も出来ますので収入の点ハ現在の先生の収入と大差なきものでせう」と書かれている。この手紙がきたことが直接の契機となって、写真 3 のとおり、泰治洋行顧問として昭和 14 年 10 月 10 日から 1 ヶ月間、

中国（北京・済南・青島・天津方面）に渡った。当時、弁護士をしていた給料と大差がないような給料を出すということはこの会社が大変儲かっていることもわかる。

殿岡氏によると、本間と桑原は表と裏の関係にある。本間は学者だから直接手を下さず、口利きでこの桑原に仕事を回していたようである。本間が「私の代理でやらせます」と言うと面白いように仕事をくれた。本当は本間が自分で会社経営をしたかったのかもしれない。

## 4．実業家桑原用二郎について

大学史事務室の資料には、昭和23年4月に設立された株式会社松庫商店（まつくらしょうてん）に関する資料がある。おそらく戦後日本に帰国した桑原が、泰治洋行に代わる会社として設立したのではないかと考える。ちなみに、桑原の出生地長崎市に明治19年創業の有限会社松庫商店という「からすみ」を販売している会社がある。同じ会社名であることは何か関係がありそうだ。残念ながら現在はこれ以上分からない。帝国銀行会社要録によると株式会社松庫商店は昭和23年4月設立、鉄鋼鉄屑売及び非鉄金属売買並びに沈没船引揚解体をしていた。

本学には桑原に関する資料はないが、『激動を伝えて一世紀　長崎新聞社史』に桑原についての記述がある。桑原は、昭和26年5月、長崎日日新聞社会長に就任、昭和34年1月、長崎日日新聞社と長崎民友新聞社との合併を実現、さらに昭和37年12月、長崎新聞社社長に就任した。昭和26年6月の桑原新会長披露宴でのあいさつで次のように述べている。「私の人生―それは一口に申して波乱万丈と申しましょうか。小学校はロクに出席しておらず、長崎高商に入学するときは恩師大塚運象先生の努力により、12対10の教員の採決で辛うじてはいれたのである。高商から東京商大へ、その後、私は全国放浪の旅を続けたものである。そして朝鮮、満州、中国など世界を駆け巡り、富を築いた。しかし、3年前帰国したときは無一文であった。鉄屋がうまく当たって今日相当数の富を築くに至った。私の処世訓は早起きとまじめに人の二倍働くことである。」[8] 桑原のひととなりがわかる言葉である。

## さいごに

愛知大学は創立65年を迎える。創立以来、幾度となく危機に直面し、乗り越えてきた。ここで紹介した資料をとおして、改めて本間先生のすばらしさに感動する。そしてこの人脈が愛知大学を救ってきたことにも心惹かれる。思えば、東亜同文書院大学最後の学長として、大学運営・閉校処理を行ない、大学の財産ともいえる学籍簿・成績簿を持ち帰り、そして帰国したその年に学生・教職員の受け皿となるべく愛知大学を創ったことは本当に大変であった。本間先生の資料に触れ、当時の様子や人間性を知ることは私にとってはとても幸せなことであり、宝物となっている。殿岡氏には本間先生のことを機会のあるごとにお話ししていただき、随分多くのことを教えていただいた。今後も「本間喜一」資料をとおして愛知大学のすばらしさを伝えていきたい。

**注**

1）『私の履歴書　経済人35』日本経済新聞社　平成16年　90頁。
2）同上　108頁。
3）同上　111頁。
4）一橋大学ホームページ「一橋大学附属図書館常設展示より杉村廣蔵と白票事件」
5）『中国紳士録　上』ゆまに書房　2007年　180頁。
6）『日本製鉄株式会社史』日本製鉄株式会社史編集委員会　昭和34年　834～835頁。
7）同上
8）『激動を伝えて一世紀　長崎新聞社史』長崎新聞社　平成13年　228頁。

**参考資料**

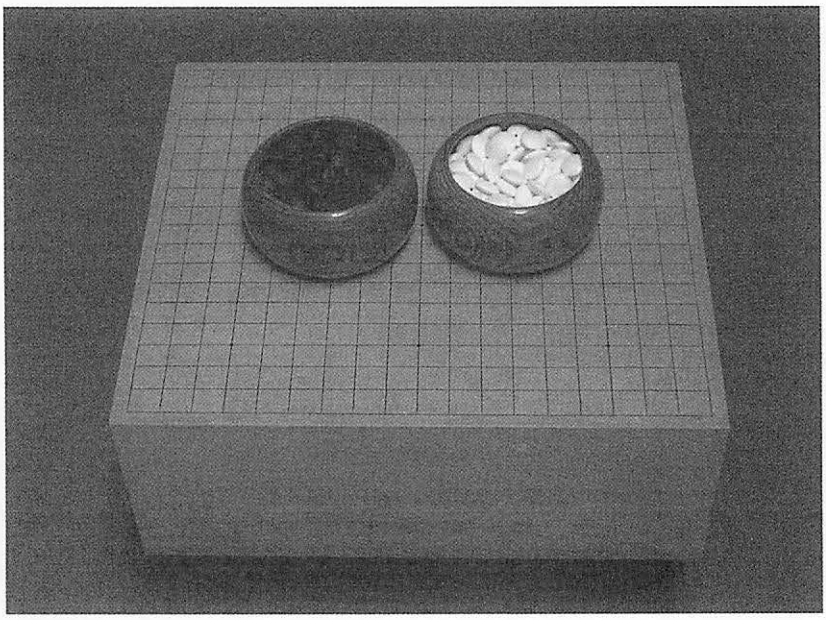
『私の履歴書　経済人35』日本経済新聞社　平成16年
『日本人名辞典』講談社　2001年
『日本紳士録　第72版』ぎょうせい　1992年
株式会社オリエンタルランドホームページ

建財株式會社

社長 本間喜一

本社 東京都千代田区丸ノ内二ノ一八(岸本ビル)
新館 二〇二号
電話東京二八局(28)一〇〇〇四—〇〇〇五番
七二四七—七二四九番
川崎出張所 川崎市武蔵新城駅前
支店 横浜市

(写真1)



(写真2)

乘船券第三三二七七號發行濟

J.T.B.
14.10.-7
東京駅南口
案内所

代々木

身分證明書

本籍 山形縣南置賜郡玉庭村大字玉庭一八三番地ノ一

現住所 澁谷區代々木本町七八六番地

職業 恭信洋行顧問

本間喜一

明治三四年七月一五日生

一、渡支目的 恭信洋行社務ノタメ北京、濟南、青島、天津方面ヘ赴クモノ

一、理由 右ニ同

一、期間 昭和十四年十月十日ヨリ一ヶ月間

右證明候也

昭和十四年十月六日

代々木警察署長 警視 伊藤武太郎

（写真３）

證

軍押收ニ關スル屑鐵ニシテ方面軍ヨリ弊社ニ蒐集整理ノ命令アリタルモノハ凡テ泰冶洋行ヲ弊社ノ代行機關トシテ之カ實施ノ業務ヲ擔當セシムルモノナルコトヲ證ス

昭和十五年三月廿二日

日本製鐵株式會社
北支出張所長　齋藤　壯一

（写真４）